



センター長報告

宗教間教育の必要性

9月12～14日、同志社大学を会場として日本宗教学会第73回学術大会が開催された。日本宗教学会は宗教系の学会の中では最大規模のもので、大会には600名を超える参加者があり、伝統宗教から昨今のスピリチュアリティに至るまで実に多彩な研究発表がなされた。CISMORの関係者も研究成果の一部を発表するためにパネル発表をした（代表・勝又悦子「宗教における「自由」「平等」—宗教の学際的研究に向けて」）。私自身は別のパネル「宗教多元時代における宗教間教育の実践とその課題」において発表をした。

このパネルは、私が現在議長を務めている京都・宗教系大学院連合（K-GURS）が主体となって企画されたものであるが、まだ一般的には認知されていない「宗教間教育」（interfaith education）をテーマとした。CISMORは一神教間の関係性をめぐる研究を行い、一部、教育の働きを担っているが、K-GURSは一神教だけでなく、仏教や神道に關係する宗教系大学院の連合体で、単位互換などの事業を行っている。そうした取り組みを事例として、個別宗派・宗教の教育だけでなく、なぜ異なる宗派・宗教に対する学びが必要なのかを論じた。その中では、私が一神教研究や宗教間教育に携わることになる原点とも言えるドイツでの留学体験についても触れた。

私がドイツに留学していた1980年代終わりから1990

年代始めにかけて、いくつかの大学の神学部でイスラームの授業がカリキュラムに組み込まれ始め、私は、その最初の学生であった。トルコ移民を中心とするムスリム住民の増加にともない、様々な軋轢が生じ始めていたことが、その背景にあった。ドイツでは宗教改革の時代から、イスラームに対する敵対的な感情があったため、それを現代において再現しないためにも、キリスト教とイスラームの「間」に対する学問的関心があったと言える。

こうした変化には、その前史がある。「間」を問う前史とは、第二次世界大戦後のキリスト教とユダヤ教の關係である。ドイツではホロコーストへの反省を踏まえた神学教育が徐々に整えられ、未曾有の悲劇は、まさに両宗教の「間」の機能不全が引き起こしたという認識のもと、両者の關係の再解釈・再構築に大きな教育的エネルギーが注がれた。これはイスラームとの対話に先立つ宗教「間」教育と言えらるだろう。

現代の日本では、ヨーロッパにおけるほど宗教間の軋轢や緊張があるわけではない。しかし、一神教対多神教といった単純な二項対立が放置されると、偏見と憎悪の増殖が起こらないとも限らない。他者への正しい理解と敬意を持つためには、「間」を問う研究と教育が、どの社会においても必要なのである。

（一神教学際研究センター長 小原克博）



公開講演会

シンポジウム

研究会

報告

公開講演会

ダン・ブラウン最新刊『インフェルノ』を10倍楽しむ —美術史および宗教学の視点から—

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
GRM（グローバル・リソース・マネジメント）プログラム
共催：同志社大学神学部・神学研究科

【講師】竹下ルッジェリ・アンナ（京都外国語大学准教授）
小原克博（同志社大学教授、一神教学際研究センター長）

【日時】2014年1月29日（水）16:00 - 18:00

【会場】同志社大学今出川キャンパス 神学館礼拝堂

2014年1月29日、京都外国語大学准教授の竹下ルッジェリ・アンナ氏とCISMORセンター長の小原克博氏による公開講演会「ダン・ブラウン最新刊『インフェルノ』を10倍楽しむ—美術史および宗教学の視点から」が開催された。『インフェルノ』は、『ダ・ヴィンチ・コード』で知られる作家ダン・ブラウンの最新刊で、フィレンツェ、ヴェネツィア、イスタンブールを主な舞台とするスリリングな物語が展開されている。竹下氏と小原氏は、主に美術史と宗教学の視点から、この作品を引き立てている西洋美術、キリスト教、さらにはイスラームに関する多様な情報について確認し、『インフェルノ』の背景世界へと迫っていった。

はじめに竹下氏が「ダン・ブラウンの『インフェルノ』から見たイタリアの文学と美術」と題して講演した。竹下氏はまず、ダンテ（1265-1321）の長編叙事詩『神曲』、とりわけ『地獄篇』と、『インフェルノ』（イタリア語で「地獄」）の詳細な関わりを確認した。次いで竹下氏は、『インフェルノ』の中に、『神曲』についての不正確もしくは一面的な記述がいくつあると指摘した。たとえば、「影」という言葉の理解、「中立を標榜する者」に与えられる場所、『地獄篇』が描きだす世界が教会に通う者を増加させたという記述などがそれである。とはいえ『インフェルノ』エピソードの「ダンテの詩は地獄の惨状というより、どんな過酷な試練にも耐える人間の精神の力を描いたものだ」という言葉は、ブラウンがダンテの詩の本質的な部分を理解していることを示しているという。この他、竹下氏は、ボッティチェリ『地獄の見取り図』、ヴァザーリ『マルチャーノ・デッラ・キアーナの戦い』とそこに記された“Cerca trova”という文字、500人大広間、ヴァザーリの回廊、サン・

ジョヴァンニ洗礼堂、ヴェネツィアのサン・マルコ寺院など、『インフェルノ』に登場するイタリアの絵画や建築について、スライドを用いて紹介、解説した。

竹下氏につづいて、小原氏が「ダン・ブラウン『インフェルノ』の世界観を読み解く」と題する講演を行った。小原氏は、中世ヨーロッパにおける地獄・天国・煉獄の観念や終末論について、日本や現代文化との関わりにも言及しつつ解説し、それらキリスト教的な諸概念が『インフェルノ』の作品世界において重要な役割を果たしていることを指摘した。また『インフェルノ』はイスタンブール、すなわち歴史的に東西のキリスト教とイスラームそれぞれの影響を受け、東西文明の接点となってきた街をひとつの舞台としているため、キリスト教とイスラームという一神教学際研究センターがこれまで扱ってきたテーマとも関わってくる。たとえば小原氏によれば、『インフェルノ』88章の主人公ラングドンの言葉からは、そうしたキリスト教とイスラームの、図像に対する考え方のちがいや聖なるものの描き方の違いを垣間見ることができる。すなわちキリスト教、特にカトリックと正教会は神や聖人を絵画やイコンで描写することを好むが、イスラームは聖なるものを絵画として表現することを禁じ、飾り文字や幾何学模様で表現する。こうした図像に対する考え方の違いは、以前、一神教学際研究センターでも取り上げた2005-2006年の預言者ムハンマドの風刺画問題の重要な背景になっている。そして小原氏は最後に、『インフェルノ』が人口爆発による破局という倫理的課題にどう応答しうるかという問いを投げかけていると指摘し、講演を締めくくった。

当日は100名を超える来場者があり、人々の関心の高さをうかがわせた。

（CISMOR特別研究員 杉田俊介）



竹下ルッジェリ・アンナ氏

公開ワークショップ

Islam and the State Regulation of Halal Market

(ハラール食品のグローバリズム—イスラームとハラール市場に対する政府の規制)

主催：早稲田大学重点領域研究機構アジア・ムスリム研究所
共催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【講師】Johan Fischer (Associate Professor, Roskilde University)
Florence Bergeaud-Blackler (Research Fellow, IDEMEC/CNRS)
【日時】2014年3月6日 (木) 14:00 - 17:15
【会場】同志社大学今出川キャンパス 神学館礼拝堂

2014年3月6日、早稲田大学重点領域研究機構アジア・ムスリム研究所主催、同志社大学一神教学際研究センター共催の公開ワークショップ「ハラール食品のグローバリズム—イスラームとハラール市場に対する政府の規制」(Islam and the State Regulation of Halal Market)が開催された。ハラールとは、イスラーム法において「合法」、「許された」モノやコトを指す。近年ハラール食品をめぐる巨大な市場に、世界的な関心が集まっている。本ワークショップでは、講師としてハラール食品に関する社会経済的研究で活躍する二名の人類学者—Johan Fischer氏(デンマーク、ロスキレ大学准教授)、Florence Bergeaud-Blackler氏(フランス、地中海ヨーロッパ比較民族学研究所主任研究員)—が招かれ、ハラール食品の生産・流通と、それに対する政府・国際機関の規制について議論された。

Fischer氏は、“Global Halal Production, Trade and Regulation”(グローバルな市場におけるハラール製品の生産・貿易・規制)と題し、マレーシアとシンガポールの事例を中心に講演した。近年の大量生産はハラール性が疑わしい製品—含有成分や、原料購入から製造販売に至る過程も問われる—を増加させた。この結果、ハラールの規制および認証を求める声が世界的に強まっている。こうした状況の中、マレーシアとシンガポールは他国に先駆けてハラールに関する規制、認証を国家レベルで行い、世界のハラール市場にも影響を与えている。マレーシアでは、イスラーム復興、経済成長、ムスリム中間層の誕生、都市化と産業化、そしてマレー系ムスリムと中国系住民からなる民族構成を背景に、1970年代以降、ハラールへの関心が強まった。一方、隣国シンガポールでは、中国系が多数を占め、マレー系ムスリムは少数派である。したがって国内のハラール市場は小規模

であり、ハラールの規制や認証においても周辺諸国の大規模なハラール市場が強く意識されている。またFischer氏は、シンガポールの「ハラール・トレーニング」の体験談や、スーパーマーケットにおけるハラール食品とノン・ハラール食品の分離のあり方についても紹介した。

Bergeaud-Blackler氏は、“The International Development of Halal Food Standards: the European Case”(ハラール食品基準の国際展開—ヨーロッパの事例)と題し、現代におけるハラール基準の世界的展開について講演した。1980年代、オーストラリアとニュージーランドは、中東のムスリム向けに屠畜方法を変えた食肉を輸出するようになった。これが国際的なハラール市場のはじまりである。1990年代には、ムスリムが少数派である地域でハラール食肉市場が成長。2000年代にはハラール認証がムスリム向け食品の「パスポート」となるに至った。ただしハラールの基準はさまざま、現在では、屠畜方法等をめぐって100以上のハラール基準が存在する。グローバルな統一基準を設ける動きもあったが、地域間の事情の違いなどから成功していない。ハラール基準に関する5つの国際機関—The World Halal Council(カナダ、アメリカ)、International Halal Integrity Alliance(マレーシア)、Gulf Standard Organization(湾岸)、Standard and Metrology Institute for Islamic Countries(トルコ)、European Committee for Standardization(EU)—も、唯一の基準ではなく、独自性のある基準によって特徴を出し、相対的優位性を得ることを目指している。Bergeaud-Blackler氏は、ハラール基準の統一は、イスラーム世界の多様性を単一化するのと同じほど困難であると結論づけ、講演を締めくくった。

ワークショップでは、小島宏氏(早稲田大学アジア・ムスリム研究所所長)司会による、質疑応答の時間も設けられた。当日



Johan Fischer 氏



Florence Bergeaud-Blackler 氏

は70名ほどの人々が来場。熱心にメモを取る姿が多く、日本でも食のハラールに対する関心が強まりつつあることがうかがえた。

(CISMOR特別研究員 杉田俊介)



四戸潤弥氏、Mohammad Al-Mamari 氏

The 2nd workshop “Oman and Islam”

Oman's Message of Islam: Tolerance, Understanding and Coexistence

(イスラームについてのオマーンからのメッセージ——寛容・理解・共存)

主催： Ministry of Awqaf and Religious Affairs, Sultanate of Oman
同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【ゲスト】 Mohammad Al-Mamari

(Adviser to the Minister of Awqaf and Religious Affairs, Oman)

【コメンテーター】 小原克博

(同志社大学教授、一神教学際研究センター長)

【日 時】 2014年6月6日 (金) 17:00 - 19:00

【会 場】 同志社大学室町キャンパス 寒梅館クローバーホール

本シンポジウムではまず、オマーン国の宗教・ワクフ省顧問であるMohammed Al-Mamari氏よりオマーンの歴史と宗教についてのスピーチが行われた。

オマーンは海洋国家であり、インド洋周辺から中国に至る人々との交流が三千年前から行われてきた。歴史的に見ても、オマーンでは様々な宗教を信仰するコミュニティが存在し、他者を受け入れること、相互理解、平和的共存が実現されていた。紀元前2000年にさかのぼればシュメール文明やインダス文明へ銅の輸出を担っていたマガンの交易商人とはオマーンの人々のことであり、またその後の時代にはオマーン南部の香料が重要な輸出品としてエジプト人やローマ人と取引されていた。19世紀に入るとオマーンの交易拠点はアフリカのザンジバル島まで拡大し、象牙と香辛料が主要な商品として取引され、現代では石油と天然ガスが最も重要な輸出品となっている。そして1970年代以来、カーブース・サイド・アール＝サイド国王陛下の主導により、伝統を破壊することなく国家を現代化することを目標として、国家発展のための社会的、政治的政策が取られている。

オマーンのイスラームの受け入れは、預言者ムハンマドが生きていた時代に平和的になされた。西暦629年にオマーンのソファールの二人の王（ジュランダの息子アブドとジャイファー）は、預言者ムハンマドからイスラームへの帰依を熱心に説得する書簡を受け取り、二人は自由意志でイス

ラームを選択し、信徒となったのである。

イスラームの哲学は宗教的寛容、紛争や暴力の回避という原則に基礎付けられており、オマーンのイスラームの多数派はイバード派であるが、モスクではスンナ派とシーア派の礼拝も行われている。イバード派は常に、攻撃されない限り戦わないことを明確に表明し、神学的な違いのための流血は恥ずべきこととみなしてきたのである。またオマーンではキリスト教徒、ユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、シーク教徒ほかの信徒たちも生活してきた。彼らは何世紀もの間、宗教的寛容の原則に基づき、オマーン社会に受け入れられてきたのであり、所属する宗教によって隔離されるようなこともなかった。現在、オマーンの家や政府公認の礼拝所以外の場所では許されていないが、宗教的実践は禁じられていない。

以上のスピーチの後、“Religious Tolerance in Oman”と題されたフィルムが上映され、それに続いて小原克博氏によるコメントがなされた。小原氏は、オマーンのイバード派は少数派ではあるとしても、その寛容の理念・文化は現代の世界へ貢献し得るものであり、日本の平和の文化とも価値観を共有し得るのではないかと、またこのような機会を通して自分とは異なる他者に実際に触れ、理解することを通して、他者に



ギャラリー展示 「Oman and Islam」

単純なラベリングをする誤りを避け、より豊かな寛容の精神を養うことが可能となると指摘した。

その後、参加者との質疑応答の時間が持たれたほか、双方による記念品の交換も行われ、盛況のうちに終了した。またこの

後、ワークショップ会場隣のギャラリーにて開催されていたオマーンやイスラームを紹介する展示の解説も行われた。

(CISMOR特別研究員 朝香知己)

非公開研究会

一神教の「学際的研究」への期待と展望

エコロジー経済学とキリスト教神学との対話

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【講師】和田喜彦 (同志社大学教授)

【日時】2014年7月12日 (土) 14:00 - 17:30

【会場】同志社大学今出川キャンパス 待辰館CISMOR会議室

本研究会は「エコロジー経済学とキリスト教神学との対話」と題して、同志社大学経済学部教授の和田喜彦氏による発表がなされた。

和田氏はエコロジー経済学を「持続可能性の達成を目指し、生態系全体の循環の一部としての人間経済活動を学際的に研究する学問」と定義し、そしてWilliam E. Reesの考えを元に、それをまずモデルという点から説明する。それによれば、人間は現実を認識するためにモデルを必要とするが、モデルと現実とは別物であるため両者の乖離が生じることがある。そして誤ったモデルは様々な問題を引き起こすのであり、その一つが環境問題である。つまり環境問題の根源的原因はモデルが現実を正確に表していないことにあると言える。

エコロジー経済学のモデルは、現在主流の経済学のモデルとは異なり、資源の有限性、市場や科学・技術の限界の認識、環境収容力の範囲内への経済活動の制限のほか、ホワイトヘッドのプロセス哲学の影響を受けたJohn B. Cobb Jr.のプロセス神学の考え方を色濃く反映した、全体論、有機体論的世界観、コミュニティーの中での人間、経済規模の拡大よりも分配の公平さの重視などを特徴とする。

そしてCobbは経済学を含む学問を有機体論的世界観から再検討している。第一の問題点は専門分野の孤立化であり、これが全体状況に対する無責任を生み出していると考えられる。その克服のためには、ライフサイクル分析 (LCA) の拡張、新技術評価体制の構築、また無責任主義への対応として環境影響評価の公開、評価者・政策決定

者の氏名公表、出資者・融資者の結果責任の追求、内部告発者の保護、生存基盤の破壊に対するゼロトレランスの姿勢などが必要だろう。第二は具体性と抽象を置き違える誤りであり、例えばGDPの増大が追求されるが、その量的増大が必ずしも生活の質の向上に向かうとは限らない。そして第三に経済至上主義から地球至上主義への転換が求められる。その一つとして、経済成長の負の側面を含めたより具体的な内容を反映可能なISEW (持続可能な経済と福祉指標) やGPI (真の進歩指数) などの指数の改良と適用がある。

またReesとWackernagelらによって開発されたのが、エコロジカル・フットプリント指標である。持続可能性とは自然の能力の範囲内でよりよい生き方を送ることを意味し、自然の能力を超えないことが第一条件となるが、この指標は人類の経済活動を維持するために必要な生態系に対する需要量を土地面積で示すものである。それによると地球上の生産可能な土地水域面積は一人当たり1.8グローバル・ヘクタール (gha) であるが、全世界での土地水域への需要は一人当たり2.6ghaとなっており、需要過多でバランスが取れていない状態にある。また各国別ではアメリカ人の消費生活は1人当たり9.4gha、日本人は4.9ghaが必要となっており、今後は地球の環境収容力の範囲内でやりくりできる経済を実現することが求められると指摘し、和田氏は発表を締めくくった。その後、参加者との質疑応答の時間が持たれ、活発な議論が行われた。

(CISMOR特別研究員 朝香知己)



和田喜彦氏

公開講演会・非公開研究会

19～21世紀の世界におけるユダヤ人の移動—日本・極東との関係

The World Jewish International Migration System, 1880-2014

(ユダヤ人の国際移動システム—1880-2014)

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

共催：同志社大学神学部・神学研究科

【講師】 Uzi Rebhun

(Professor, Hebrew University of Jerusalem)

【日時】 2014年9月21日(日) 13:00 - 17:30

【会場】 同志社大学今出川キャンパス クラーク記念館チャペル



Uzi Rebhun 氏

Rebhun氏は、1880年から2014年の約130年間の時期におけるユダヤ人の国際移住の状況を、詳細な統計などを示しつつ、明らかにした。

ユダヤ人ほど空間的に移動し、世界にひろがっている民族は少ない。神がアブラハムに「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／私が示す地に行きなさい」(創世記12章1節)と語って以来、ユダヤ人の歴史は、何世紀にも渡る離散と帰還の繰り返しだった。そして現代におけるユダヤ人の移動は劇的なものになっている。地理を最も広い意味で理解することが、ユダヤ人の歴史、社会、文化構造を理解するうえで重要である。

18世紀初頭、世界におけるユダヤ人の人口は約100万人であった。彼らは虐殺および迫害の対象だったため、人口を増やせなかった。18世紀後半には特にヨーロッパにおいて人々の寿命が延び、出生率も上がった。ユダヤ人の人口も2倍の250万人に増えた。19世紀末には1000万人になり、第二次世界大戦の直前には、1650万人となった。しかし、ホロコーストで600万人のユダヤ人が命を奪われ、わずか6年間で総人口の3分の1が失われた。第二次世界大戦以降、ユダヤ人の人口は徐々に増え現在の総人口は1400万人強と見られている。19世紀末は10人中9人のユダヤ人がヨーロッパ、特に東ヨーロッパに住んでいた。この130年間における移住の結果、世界のユダヤ人のうちの約43%がイスラエル、約40%がアメリカに現在集まっている。統計的に、経済的に発展し、政治的に安定している民主主義国家などにユダヤ人は住んでいるが、これはこれまでのユダヤの歴史の大半の状況とは異なる。

ユダヤ人の空間的な広がりを考える際に、「ホームランド」と「ディアスポラ」という概念が重要となる。イスラエルに住むユダヤ人と、それ以外のところに住むユダヤ人の間に区別を見取るのである。シオニズムは、「イスラエルはユダヤ民族のホームである」という考えを、イスラエル国家の要、独立宣言の基礎とした。イスラエルを物理的に住む場所というだけでなく、宗教的、文化的なバイタリティの源と見做している。イスラエルへ移住することはヘブライ語で「アリヤー」(シオンに上る)と表現する。数はずっと少ないが自分の意志でイスラエルを出て、他の地域に定住する人もいる。イスラエルから他の国へ移住することを、「イェリダー」(下っていく)と表現する。興味深いことに、他の地域に住んで、イスラエルとのつながりが薄れると同時に、ユダヤ人としての宗教、民族的なアイデンティティは強まる傾向を示す(儀式や食事規定などの慣行)。海外に行ったユダヤ人は受入社会に同化するのではなく、その国にあるユダヤのコミュニティ、すなわちディアスポラに統合される傾向にある。

講演後の研究会では、イスラエルから米国とヨーロッパに移住した人々の文化変容とトランスナショナリズムが比較検討され、イスラエル出身の移民とロシア出身のユダヤ人に同様の諸傾向が見られるか、EUのイスラムの移民集団にも同様の傾向が見られるか、などの問いが論点となった。

(CISMOR特別研究員 平岡光太郎)

2013年度後半 活動報告

主催イベント

2014年4月2日(水)

▼CISMORセミナー

「Christianity in China」

講師：Kim-Kwong Chan（香港キリスト教協議会
Executive Secretary）

コメンテーター：Alan Hunter（コベントリー大学教授）
会場：待辰館CISMOR会議室



2014年6月3日(火)

▼CISMORセミナー

「The Orthodox Church and Inter-faith Dialogue」

講師：Brandon Gallaher（オックスフォード大学教授）
コメンテーター：田辺寿一郎
（コベントリー大学研究員）

会場：待辰館CISMOR会議室



2014年6月3日(火) ～7日(土)

▼ギャラリー展示

「Oman and Islam」

会場：寒梅館地下1階ギャラリー
共催：Ministry of Awqaf and Religious Affairs,
Sultanate of Oman

2014年6月6日(金)

▼公開講演会

「イスラームについてのオマーンからのメッセージ
—寛容・理解・共存」

ゲスト：Mohammad Al-Mamari（Adviser to the Minister of
Awqaf and Religious Affairs、オマーン）

コメンテーター：小原克博（同志社大学教授）

会場：寒梅館クローバーホール

共催：Ministry of Awqaf and Religious Affairs,
Sultanate of Oman

2014年7月11日(金)

▼CISMORセミナー

「Memories or Politics? Relations between China and Japan」

講師：Alan Hunter（コベントリー大学教授）

コメンテーター：田辺寿一郎

（コベントリー大学研究員）



2014年7月12日(土)

▼非公開研究会

「エコロジー経済学とキリスト教神学との対話」

講師：和田喜彦（同志社大学教授）

会場：待辰館CISMOR会議室

2014年9月21日(日)

▼公開講演会

「ユダヤ人の国際移住システム」

講師：Uzi Rebhun（ヘブライ大学教授）

会場：クラーク記念館チャペル

▼非公開研究会

「移民の文化変容とトランスナショナリズム：
米国と欧州在住のイスラエル人の比較」

講師：Uzi Rebhun（ヘブライ大学教授）

コメンテーター：野村真理（金沢大学教授）

来訪者記録

2014年4月

Kim-Kwong Chan

香港キリスト教協議会、Executive Secretary (中国)

Alan Hunter

コベントリー大学、教授 (イギリス)

2014年6月

Brandon Gallaher

オックスフォード大学神学部、

British Academy Postdoctoral Fellow (イギリス)

田辺寿一郎

コベントリー大学 平和と和解研究所、研究員

(イギリス)

Mohamed Said Khalfan Al-Mamari

宗教・ワクフ省、顧問 (オマーン)

Sultan Said Saleem Alhinai

宗教・ワクフ省、顧問 (オマーン)

Khalid Aaish Sultan Al Naseery Al Hashmi

宗教・ワクフ省、顧問 (オマーン)

Ameer Ali Khalfan Al Mamari

宗教・ワクフ省、顧問 (オマーン)

Badar Saif Said Al Harthi

宗教・ワクフ省、顧問 (オマーン)

Ali Mohammed Ali Saar

宗教・ワクフ省、顧問 (オマーン)

Mohamed Ali Hashil Al Malki

宗教・ワクフ省、顧問 (オマーン)

2014年7月

Alan Hunter

コベントリー大学、教授 (イギリス)

田辺寿一郎

コベントリー大学 平和と和解研究所、研究員

(イギリス)

2014年9月

Uzi Rebhun

ヘブライ大学、教授 (イスラエル)

野村真理

金沢大学、教授

お知らせ

CISMORの出版物である『一神教学際研究(JISMOR)』と『一神教世界』は、電子版の需要に鑑みて、かねてより機関リポジトリの導入や当研究センターウェブサイトでのPDFファイル公開などによる電子版への移行準備を進めてきました。

今年度より、これらの出版物の公開につきましては、電子版のみの発行となります。

CISMOR 最新情報を配信中です

<http://www.cismor.jp>

CISMORウェブサイトより、最新情報を発信しています。出版物をはじめ、過去の講演会の動画、ニュースをご覧ください。

発行	同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)	TEL 075-251-3972 FAX 075-251-3092
	〒602-8580 京都市上京区今出川烏丸通東入	E-mail info@cismor.jp
編集	CISMOR事務局編集部	デザイン 高田太